

パパが好き



群馬県 高山 恵利子

第5回日本語大賞 一般の部 文部科学大臣賞 受賞作品

水着の袋を持った少女は「あたしはパパが大好きなの。だからこっち」と私に告げて、男子更衣室を指さした。傍らのパパは初恋の相手から告白を受けた少年のように、はにかんだ笑顔で私に目礼をすると、少女を抱き上げ男子更衣室に消えた。後ろで見ていたママも満足そうな笑みを残して、一人反対側の女子更衣室へ向かった。

私はプールの受付係をしている。両親と来場する幼い子供のほとんどは、母親と一緒に女子更衣室で着替えをする。複数の子を持つ母親の場合は、父親が上の子を担当することはあるが、母を差し置いて、父と一緒に男子更衣室に入る子はいない。けれどその少女は違った。しかも男子更衣室に入りたい理由を「パパが大好き」という端的な言葉で表現した。言い終えたあとの少女の瞳の輝きと、パパの汗ばんだ誇らしげな表情が、私は今も忘れられない。「好き」と名指しされた父親も、素直な気持ちを伝えた少女自身をも、幸福にしてしまう言葉の不思議さを目の当たりにして、私は言葉を持つ能力を思い知らされた気がした。

少女はその率直さで、きっと家でも毎日のように「あたしはパパが好き」と言い続けているに違いない。それでも頬を上気させ反応してしまうパパ。パパがうぶなのではなく、「好き」という言葉が持つ力のように思える。どうやら人は「好き」という言葉に対して、免疫力を持たないらしい。毎日言われてもなお、新鮮な感動をもたらす不思議な言葉なのだ。「好き」とは、人の強欲さも、意地悪さも、ずるさも、臆病さも、容姿までも、すべてを肯定し、その人間を無条件で受け入れるという意思表示。底知れぬ寛大さを秘めた言葉だ。もちろん少女はその言葉の魔力さえも知らず、パパへの熱烈な思いのたけを、一言で表現したに過ぎない。こんなにも人を恍惚とさせる「パパ大好き」という言葉に、私は清々しい感動を覚えた。

私も父が大好きだったが、子供の頃父に「好き」と言った記憶はない。互いに年を重ねてからも、父娘の常で、そっけない会話を交わすだけの間柄のまま、父は逝ってしまった。最期にろうじて「父ちゃんありがとう」と、ありきたりの言葉を言えたのが、私のせめもの救いだった。けれど亡くなって三年もたつというのに、何か釈然としない思いが残った。私が大好きな父にあえて「好き」と言わなかったのは、その事実を私自身が良く知っていたから。でも言葉にしない私の気持ちを、父が分かってくれただろうか？ 父が亡くなった後も消化不良のような侘しさが、「好き」と言えなかった後悔であることに、私は少女によって気付かされた。「パパ大好き」と言う少女の言葉を聞いたとたん、父の死の間際に、私が探していた言葉だと思ったのだ。私に少女のような素直さがあって、正直に「父ちゃん大好きだよ」と言っていれば、私の哀しみは半分になっただけではないかと思う。

父の後を追うように母が逝った時、私は「母ちゃん大好きだよ」と叫んでいた。病室に兄妹や甥や姪がいたのに、照れもせず正直な心を吐露した。私が差し出したアイスクリームを、大きな口を開けて力強く食べた母の姿がただ嬉しくて、思いのたけをこめた言葉だった。昼においしそうにアイスクリームを食べた母は、夜には帰らぬ人となった。けれど

父の時のような後悔はなく、晴れやかな哀しみだった。

実をいうと、私は母が嫌いだった。人並みの暮らしを十分とする無欲な父と、それ以上を望む強欲な母。父を立派だと思えば思うほど、私は母が嫌いになった。温厚な父が村の世話役に借り出されると、一人畑から戻る母は不機嫌で、おそくに帰ってきた父が申し訳なさそうにねぎらいの言葉をかけても、一言もしゃべらなかつた。ニコリともしない母は、こけた頬と地味な服のせいで、猫背気味の薄っぺらな体が西洋の魔女みたいに見えた。母は子供にも厳しく、家中が働いているときだけ機嫌が良かった。寸暇も惜しみ起きているあいだずっと働き続けようとする母を、私は子供心に醜いと思った。

大人になってからも、私が母に寛大になることはなかつた。相変わらず、強欲でわがままな母が大嫌いだった。強欲でわがままという言葉が、そのまま自分に当てはまるとも気づかずに、私は長い間母を嫌っていた。死の間際に「母ちゃん大好き」と言ったのは、そのうしろめたさだったのかもしれない。「好き」と言ってしまった後でも、やっぱり私は母が嫌いだと思った。けれど私は嘘をついたのではない。私は本当に母が嫌い、母が好きだったのだから。母への「好き」は、「ごめんさい」の意を含んだ複雑な想いの結晶だった。

「あたしはパパが好き」という少女の一言は、私が父母へ感謝の想いを伝えられたか考える良い機会になった。父に言えなかつた純粋な想いと、母には伝えられた複雑な想い。どちらも同じ「好き」という単純な言葉で表現できるということが、私には大きな驚きだった。「好き」という素直な言葉が持つ能力を、私は改めて認識した。

人は他人に対しては、感謝やねぎらいの気持ちを素直に表現できるのに、近い人間に対して心の内を明かさない。せいぜい「ありがとう」と言うのが精一杯だ。日常生活に必要な意思疎通にばかり偏って、気持ちを伝えずに毎日を過ごしている。「あたしはパパが大好きなの」公言してはばかりにならない少女から、肉親だからこそ、目に見えぬ想いを言葉にする必要があることを教えられた。流動的で不確かな心の在りようこそ、いつも言葉に出して確かなものにする必要があるのであるのだろう。キスや握手で体に触れる習慣のない日本人が、心の在りようを伝える手段は言葉しかない。

私もいつか家族に看取られる日がくる。そのとき「お母さん大好きだよ」とだけ言ってもらえたら、私は静かな眠りにつけそうな気がする。